



村本邦子 再登場新連載

砂時計がひっくり返されて残る時間を数えるようになった今、意識的に余分なものをそぎ落とし、もっと静かに落ち着いて暮らしたいと密かに思っている。そのために、これから少しずついろいろなものを手放していかなければならない。最後にはすっかり身軽になって飛び立たなければならぬのだから。

そんななかで、十年続けようと決めているのがこのプロジェクト。どんなところに行きつくのかはまだわからないけど、とにかく記録を残していきたい。新連載のスタートです。

國友 万裕

いよいよ来年の2月で、50代の大台に乗ります。次の援助マガジンは3月発行のはずなので、今回は40代最後の原稿になります。

それにしても40代は速く過ぎました。これは、皆、言っていることだけど、年をとるごとに月日のたつのは速く感じるんですね。ぼくの人生は、10代で心が壊れ、20代は引きこもりながらもどうにか頑張り、30代で多少は仕事や友人ができるようになり、40代は様々なよい人間関係に恵まれ、仕事にも恵まれ、著書も出版しました。尻上りの人生です。この調子で行けば、50代はもっといいはずで、楽しみでもあり

ます。

50近くにもなると、自分が生まれてきた理由がなんとなくわかってきます。ぼくは10代のときに不登校という重い十字架を背負われ、その後の人生を壊れた心の回復のために生きているようなもの。つらいことや悲しいことだらけでしたが、回復の途中で、様々なことを勉強することができたことも事実です。今にして思えば、不登校は神様がぼくに与えた宿題だったんですね。

その宿題が完全に終わったのか。まだ自信がありません。しかし、完全に終わってしまったては、ぼくが生きている意味はなくなってしまうのかもしれないですね。

今年は、若い男の友人と海に行き、川に行き、スポッチャに行き、温泉に行き、食事に行き、少年時代にできなかったことをたくさん取り戻しました。とはいうものの、女性とはまだまだ上手く付き合えない。でも、その理由はつかめてきたんです。結局、ぼくが女性を理解しようとするのが間違いないんですね。最初から、わかり合えない関係なんだと割り切って、つきあうこと。そのほうが女性との付き合いを改善する早道のようにです。

さあ、50代は、女性とも実りある付き合いができるようになるかなあー。全ては神様におかませです。

岡田隆介

広島市内の三つの療育センターが合同で、毎年12月に「こどもの臨床研究会」を行っている(言い出しつべは自分らしいが記憶にない)。置き土産～遺言～捨て台詞、どれになるかわからないけど演題を出したら二枚もくれた。そこで、①わたしの思うヒューマン・スペクトラム、②私の辿り着いたヒューマンサービスという2題断をやることにした。

それにしても、40年の集大成が凝りに凝った数枚のパワーポイント原稿におさまるなんて…。

北村真也 私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>)、フリースクール「アウラ学びの森 知誠館」

(<http://tiseikan.com>) 代表。

アウラの庭に「小さな森を作ろう」という森プロジェクトが立ち上がり、先月からその工事が具体的にスタートしました。不登校、引きこもりの経験を持つ若者たちと、これまでこだわりを持って生きてきた大人たちが、出会い、語り合う場、そのしつらえとしての小さな森は、年明けにお目見えすることになります。

古川秀明

対人援助マガジンの原稿を書きながら、新しい発見や、今までなんとなくもやもやしてまとまらなかった考えがすっきりとわかるようになってきました。

講演では短時間にいっぱい詰め込んで話してしまうので、どうしても消化不良になる時もあるのですが、文章にまとめると思う存分書けます。

しかもどんな書き方をしても、どんな内容でも編集長からダメ出しが出ることはありません。

読む人にとっても、書く者にとっても意味深い内容で、編集して下さっている方々のご苦勞にただ感謝です。

団士郎

年中だと言われれば、そうではないとも言いにくいですが、それにしても慌ただしい三ヶ月だった。とにかく出かけるところが多かった。

初めての所は少なく、多くは何度も出向いている場所だ。被災地の東北4県ツアーも三年目を迎えて、同じ所に行けると、いろんな出来事が重なってゆくのが良い。

初めての場所は戸惑いながらも、好奇心が満たされる。初お目見えの宮古市では、地元FM局で話したり、日本三景松島の復興ぶりは興味深かった。元の勤務地の近く、天橋立の観光地としてのものどかしさが自分の中でうずく。

それにしても三年近く経った大槌町の何もなさは、目に厳しい。かつて町のあったところはほぼ更地状態で風に吹かれている。一方、周辺高台の狭い土地には、仮設住宅がびっしりと並んでいた

りする。

時と共に新たな事件や災害が起こり、前の出来事は忘れられてゆくさだめを覚悟しながら、それでも「又、来年も来ます」と言うと、嬉しそうにしてくれる人たちに会うと、少しは何か役割が果たせているかと思う。

坂口 伊都

我が家には、小学6年生の娘がいるのですが、先日北海道から娘の友達がやってきました。初めてのご対面です。それまではラインや文通で交流を深めていました。ラインは近代的ですが、文通は昭和っぽいですね。ご対面の前日までは、娘は嬉しいけど不安という面持ちで仲良くなれるかなと言っていました。

空港に迎えに行き、照れくさそうな顔で向き合う2人が微笑ましい。仲良くなれるかなという不安は、すぐに吹き飛んで遊び始めています。私も子どもの時に同じようなことをしていたなあと思えました。小学生にして、北海道に友達がいるってすごいよねと娘と話しています。この2人の御嬢さんが、どんな女性になっていくか楽しみです。子どもは、家庭と学校という狭い世界の中で生きて、時に息苦しさを感じているので、こうして別の場所に友がいるっていいなと感じています。そして、私がおばあちゃんとして接する日がくるのを楽しみに見守っていきたいと思っています。

浅野 貴博

日本への一時帰国中、しばらく英語の環境から離れていたため、イギリスのヨークに戻ってきてから、英語の感覚が戻るのに思ったよりも時間がかかりました。ちょっとしたこと英語で言おうと思っても、言葉が出てくるのに時間がかかったり、メールのやり取りにも時間がかかったりと、やはり言葉は日常的に使っていないと感覚や話すための筋肉が鈍るということを実感しました。一時帰国中に何度も言われましたが、英語圏の国に何年か住んでいれば、自然に英語が身に付いて'ペラペラ'になる(?)と思われがちですが、第二言語を習得するのはそんなに簡単なこ

とではありません。私は、今も自身の英語力不足を日常の様々な場面で感じており、常にimproveの必要性を痛感しています。英語の習得については、このレベルまできたから終わりというようなゴールがある'勉強'ではなく、長い旅のようなものではないかと理解しています。今日において英語は、いい悪いは別にして、英語を母国語としない人同士でのcommunicationの際の共通言語(lingua franca)になっています。英語というツールを使って、一次・二次情報を含む多種多様な情報に間接的ではなく、直接接することで、日本語を通して見ていたそれまでの景色が、少しずつ違って見えてくるようになると思います。英語に関しては、自分自身の苦労や子ども達の習得の様子などから色々と思うことがあるので、今後の連載の中で取り上げる予定です。

尾籠な話して恐縮ですが、イギリスに戻ってきて最も恋しかった日本のものは、一時帰国中に欠かさず見ていた'八重の桜'でも、はたまた日本食でもなく、ウォシュレットでした。海外での生活を楽しむ上で大事だと思うことのひとつは、日本と比べて足りないものをリストアップしないことなのですが、事ウォシュレットに関しては例外としたいです。彼の貴公子ベッカムも、日韓W杯の際にウォシュレットを複数購入したとかいう話もありますが、日本のトイレ文化とでも言うべき、細やかな心配りの数々はなかなか真似できるものではないと思います。イギリスに暮らしていると、もう一手間、二手間かければもっと便利になるのにと思うことが多々あるのですが、ウォシュレットは考え得る限りの手間をかけた、まさに日本の'お・も・て・な・し'文化の代表だと思えます。

河岸 由里子

長年生きていると色々なことに出会う。今回は「これは犯罪では？」と思うことに巻き込まれそうになった。Facebook や Twitter など、SNS は怖いと感じた事件(?)である。

私は某 SNS に参加しているが、そこは様々な企業人や自営業などで頑張ってい

る人たちのネットワークである。アメリカの友人達とのネットワークとして繋がったのであるが、そのネットを通じて、イギリスの男性からメールが届いた。その人は Ph.D. であり、弁理士もされていて、ネットにホームページもあり、自分の身分証明書とパスポートのコピーも添付してきた。信用させるための物であろう。身分証明書等が本物かどうか私にはわからないが、とにかくメールで言ってきた内容と言うのが以下の通り。

私が Kawagishi という名前であることから、Kawagishi という苗字の男性の親戚ではないかと聞いてきたのが始まりで、「その男性はずっとイギリスで石油の事業をしており、彼の Funds を管理していたのだが、彼が東北に帰省中に、東日本大震災で行方不明になってしまった。家族を探しているが大使館でも見つけられないと言われた。このままだと彼の Funds (500 万ドル) が銀行に没収されてしまう。出来れば 300 万ドルを東日本大震災に寄付し、残りを手数料として自分とあなたで折半しようと思う。同じ姓なので、銀行に申し出れば Funds を受け取ることが可能だろう」と言うのだ。私としては、同じ苗字と言っても河岸と川岸でも違う、私の親戚にそのような名前の人はいないし、東北にも親戚はいない。他人様の財産を受け取るのは犯罪だと伝え、以来連絡を取ってはいない。もしかしたら日本にいる他の Kawagishi という人がこの話にのった可能性は否めない。この話を告発すべきなのかも知れないが、銀行名も何もわからないし、事実かどうかもわからないのでそのままになっている。何とも怖い話だった。くわばらくわばら。

臨床心理士 北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

岡崎 正明

10月に家族旅行で沖縄へ行った。「子どもたちのために」・・・などというのは大人の言い訳で、数年経ったら覚えていないような年頃である。完全にこちらが行きたくての計画だ。

じつは当初そんなに乗り気ではなかった

のだが、私の背中を押したのが、以前友人に勧められて作った「宝地図」だった。やりたいことやいろんな夢を描いて飾るだけで、実現する。「そんなアホな」と思いながらも「2013年 家族で沖縄旅行へ」と書いたことが、あれよあれよと現実。視覚支援ってすごい。明確なビジョンをイメージするって大事。そして我ながら、単純な自分に感心した（「宝地図」に興味がある方はインターネットで調べたらすぐ出てくる。よかったらお試しあれ）。

頭から晴れると決めつけた（これはP循環思考）おかげで、頻発する台風の際を付いた素晴らしい旅に。水族館も沖縄そばもよかったが、1番はきれいな海と広い空。それが見られただけで「来て良かった」と心から思えた。

ドライブの途中、初めて生で飛行するオスプレイを見て、有名人にあったようにどこかワクワクしている自分に気付く。他人事だよなあ。情けない。これが毎日近所でブンブンいってると真剣に想像してみる。どんな理屈を立てても、やはりよしとする気持ちにはなれない。交付金も就職口も大事だろうが、あの海と空は人間がどうがんばったって作れない。

今度は子ども達がもう少し大きくなってから来ようと思った。そのときは、平和記念公園に連れていこう。きっと平和をイメージする手助けをしてくれるだろうから。

三野 宏治

最近の日記（FBより 一部修正）

〇月〇日

昨日は教え子の結婚披露宴だった。良い披露宴だった。新郎新婦が喜んで幸せそうであったのは当然なんだが、それ以上に親御さんへの感謝が感じられる宴だった。披露宴で初めて泣いた。

〇月×日

深夜に洗濯をしている。息子の寝小便の後始末。彼は全く起きる気配も無く大物ぶりをいかに発揮している。私はこれからコインランドリーへ小走り気味にむかい、小物ぶりをいかに発揮する予定。

〇月△日

歯の詰め物が取れた。ここ半年で3回目

だ。食べ物ではミルクキーが天敵だったし、今もそうだろう。ただ、半年前はカールを食べている時にとれたし、前は麻婆豆腐をだっただ。思わぬ伏兵にしてやられた。しかし今日は話をしていたら取れた。敵は食品だけではないようだが、ここに至っては気を付けようもないのだった。

〇月〇日

息子が幼稚園で借りてきた本『しぜんーひつじー』。タイトルに迷いが無い。言い切っている。すごいと思う。憧れる。サウイフモノニ ワタシハナリタイ。

〇月▽日

息子たちの七五三用シャツを買った。大人のシャツ以上の値段で驚いたが、普段はワゴンセール品とかおさがりばかりなのでたまには「よそいき」の服も良いと思っている。最近は「よそいき」などというのだろうか。

私が子供のころは「よそいき」の服が確かにあり、親戚のおばちゃんの家に行く時など「よそいき」が登場した。そして普段「よそいき」を着ようものなら「それはよそいきや！」と叱られた。「友達の家もよそやる。」などと口ごたえすると、間髪入れずに「それは近所や！」とやられる。圧倒的な言い様に納得していたし、今でもそう思っている。人が納得したりしなかったりするの、理屈ではないことを知った少年期の出来事だ。

×月〇日

『ダーティハリー』をみている。しかも吹き替えで。この映画とジャッキー・チェンのそれと『Mr.Boo!』は吹き替えでみたい。ルパン三世は栗田貫一にかわった。でも栗田貫一には「泣けるぜ」という台詞は言えないだろうし、似合いもしない。

こんな感じです。ただ「気楽なことばかりではない」ことを読み取っていただければ望外の幸せです。

鶴谷 圭一

子ども・子育て支援新制度のことを取り上げた。書き始めて幅広すぎるテーマにしてしまったと後悔した。幼稚園サイドからの言い分は山ほどあるし、保育園サイドからの言い分もある。では利用者の立場

で切り口を選んでみたが、書いているうちに、この制度は良いんじゃないかという気さえ起こってきて、いやいや、いかんいかん、最後は子育てとは親とは、という思い入れの強い文章になってしまった。この制度が立ち上がったときから、幼稚園団体が自分たちの利益を守るために異議を申し立てているような印象を持たれがちだが、子どもの立場を代弁しているのは我々だという自負もあり、そのことを訴えたかったのだ。

国もあつちの立場、こつちの立場を立てながらの調整は大変だと思うが、市の行政マンの言うことには、「地方主権と言っても、国はずるいんですよ、こうしろとは言わないけどこれに沿うように、という言い方で縛ってくるんですから、結局はそうなる」というようなことを言っていた。

「結局はそうなる」がイイ結果を招くように頑張ってもらいたい。

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール: osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター: haramachikinder

千葉 晃央

私がしている文章の書き方のミニ連載4回目です。

大きな六手順

- ①簡条書きでいいたいことをかく
- ②丁寧に膨らませて文章にする
- ③プリントアウトをして、前後の入れ替えを考える
- ④接続詞等、つながるように加筆
- ⑤「です」「ます」、「である」の判断
- ⑥音読で確認
- ⑦黙読でも確認

今回は④接続詞等、つながるように加筆③で前後入れ替えた印刷物を見ながら、ワード上でその順序で文章を入れ替えます。

それを読み返しながら、文章の加筆、流れを修正します。接続詞を何でつなぐかということが具体的にすることの一つです。ここで大方の文字数、ページ数が明らかになってきます。（続く）

大川 聡子

子どもの影響で、テレビアニメに詳しくなりました。その中で気が付いたのが、多様な家族の描かれ方です。子どもたちがよく見ている「フィニアスとファーブ」では、フィニアスとファーブは義理の兄弟です。悪役のデューフェンシュマーツ博士は、後に市長となる弟にあからさまに差をつけられて育てられ、それが悪役となるきっかけのように描かれています。またデューフェンシュマーツ博士には離婚歴があり、妻が16歳の一人娘ヴァネッサを養育しており、月に一度面会している様子も描かれます。その他にも、妻が有能なセールスマン、夫が専業主夫(おかしなガムボール)や、母が海外を飛びまわる音楽家で、ほぼ父子家庭の主人公(スイートブリキュア♪)など、アニメの中にもさまざまな家族が登場します。4歳から急に、赤やピンクを「女の子の色だから」と身に着けなくなり、ブリキュアを見なくなった長男に、多様な家族のあり方をこうした形で見せるのもいいのかな、と思っています。

大谷 多加志

連載のテーマにしている「K 式発達検査」について、分担執筆した本が11月に発行されました。このマガジンに書き続けたものを下敷きに、出版の意図や読者層を考慮しながら整えていきました。率直に言って、マガジンの連載がなければ書き上げられなかっただろうと思います。継続していくことが与えてくれる力を実感しています。

また、校正作業の中で多くの方に原稿を見て頂き、コメントをもらうことができたのも、普段にはない貴重な機会でした。いつも様々なチャンスを与えてくれる多くの方々に、感謝です！

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

もうすぐ大晦日だ。除夜の鐘だ。ふだんは、寺の梵鐘はノンビリとぶら下がっている。ノンビリと言うよりだらしなくぶら下がっている。「わしゃ、働かんもんね」という顔をしている。だから、鐘は鳴るのかと軽い疑念を持って眺める。お寺の鐘は鳴るの

か試してみたいが、勝手に入って打ち鳴らすなどできそうにもない。ところが大晦日は違う。梵鐘の出番だ。寺に行くと、鐘を打ち鳴らすこともできそうだ。

■そんな風に思うのかどうか分からないが、除夜の鐘を突きに人がやって来る。専光寺でも、深夜に200人はやって来る。除夜の鐘は百八と決まっている。到底足りない。煩惱の数だと言うなら少なすぎる。私は除夜の鐘の数を数えない。

■大晦日の夜には、ロウソクを境内に点すことにした。最初は暗い境内で足下の用心のために準備した。どうせならと、500個のロウソクを並べた。山門のところで、携帯を出して写真を撮っている人が増えた。私たちは気をよくして、ロウソク1000個にしようか、と言っている。大晦日だ、年越しだ、近所の寺を覗いてみよう、と思ってもらえると嬉しい。それぞれの寺で、その様子は異なっているのがいい。甘酒を出す寺がある。日本酒とおでんを用意している寺もある。それぞれの、小さな地域の風物詩である。それが暮らした。

川崎 二三彦

わかりやすさの問題

「むずかしいことをやさしく、
やさしいことをふかく、
ふかいことをおもしろく、
おもしろいことをまじめに、
まじめなことをゆかいに、
そしてゆかいなことはあくまでゆかいに」
というのは、今ではかなり有名になった井上ひさしの言葉だが、我が身を顧みると、どうやら1行目ならば、少しぐらいは近づいたかなと思っていたところ……。

*

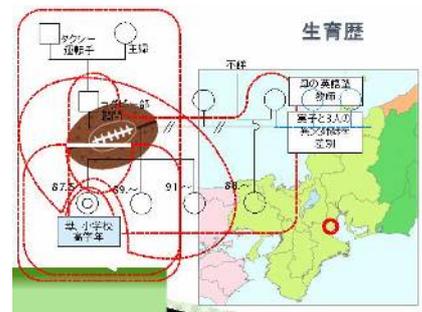
研修講師を依頼されることが多くなつて、軽蔑していたパワーポイントを使うようになったのはいつ頃のことだろうか。何しろ私の勤務する子どもの虹情報研修センターは、ほぼ隔週で3日間とか4日間の研修を企画・運営しているので、たくさんの講師がやってくる。今ではそんな講師の大半がパワーポイントを使うのだが、ある日のことだ。画面を見ていたら、縦に引かれた1本の線が、右から左へずうっと移動する

ではないか。いやはや驚いたのなんの。

“こんなことができるんや”

と思った瞬間から、俄然パワーポイントに興味を湧いてきた。そのうち、サイズを決めることで正確な円や正方形を書き表せるようになり、アニメーションを活用して、まるでその場で線を引くようにしてジェノグラムを描きあげする方法も覚えてしまった。写真やイラストを使用することを思いついて多用、グラフだって自由自在、画面上にグラフの各要素を少しずつ表示していくことも朝飯前だ。消えたり現れたりもお茶の子さいさいで、画面はめまぐるしく動いてくれる。

こうなると、1枚のスライドの中に写真や文字、グラフなどが重なり合い、込み入ってしまうので、単純にスライドを印刷しても一見すると何のことかわからず、参加者に配付するわけにもいかない。そもそも私は世阿弥の「風姿花伝」に「秘すれば花」という一節を見つけてから、話す内容は、直前までなるべく伏せておこうと考えているので、研修参加者にあらかじめ資料なんか配りたくないのである。



そこで最近は、レジメ(事前配布資料)に「使用するスライドは、都合により資料として配付いたしません」と断りを入れているのだが、中には是非ともスライド資料がほしいと希望する者も出てくる。基本的には応じていないものの、事情があつて配らざるを得ないことがあるので、その場合は「終了後配付資料」という形にしてスライドを配付用に修正、加筆等したものを用意するという大盤振る舞い。となると1回の講座で、スライド完成までにおそらく何百もの動作を一つずつ点検、確認しながら設定するという根気のいる作業に加え、「レジメ」「スライド(パワーポイント)」「終了後配付資料」と都合3種類の資料を作成すること

になり、準備作業には途方もない時間と労力をつき込むことになる。

*

それにしても、今年の秋はかなり追われた。頼まれるままにあれこれ引き受けていてふと手帳を見たら、9月上旬から年末まで、毎週どこかで必ずそんな仕事が入っているのである。

「ウウム、今年は結構忙しい。あちこち出かけねばならんぞ」

などと呟いていたら、

「あっ、私も付いて行く！」

という呑気な声があるのではないかと。

振り向くと、……まあ、誰であるかはお察しの通り。いくつかの候補の中で、島根大学医学部看護学科からの依頼が都合よく金曜日だったので、その後にオプションツアーを計画した。

のだが、その前々週、新潟での全国児相研セミナーからの帰途の新幹線のことだ。窓際に座ったおかげで風邪を引いてしまったのである。なおかつ、売薬に頼ったのが悪かったのか全然回復せず、次週の厚生労働省主催児童虐待防止推進月間シンポジウム(大分・別府)では、前後不覚の中で何とか役目を終えたものの、体力と気力は使い果たしてしまった。

幸い、島根大学で話している最中に、2週間近く悩まされた風邪はようやく終焉したが、遅れを取り戻す時間は「島根観光」で奪われ、後悔の旅となったのである。



ただし、せっかく島根までやって来たのであれば、京都までは伯備線岡山経由で帰ればよいのだから、途中には是非とも立ち寄りたところがある。松江から特急

やくもで新見駅に下車し、ちょうど一時間後の特急に間に合うよう、新見市本郷小学校まで足を伸ばすことにした。岡山県阿哲郡哲多町(現在の新見市)は、彼の山室軍平の生地なのである。

「あのう、山室軍平の……」

「ええっ? 個人名を言われても住所か何か教えてもらわないと……」

行き先を告げようとしたら、山室軍平なんて全く聞いたこともないという運転手がびっくり仰天した。慌てて哲多町の本郷小学校だと伝えて連れて行ってもらった。さて記念碑は、紅葉の下、日曜で生徒はおろか誰ひとりいない校庭の隅に、ひっそりと佇んでいたのであった。



というわけなので、もしかして偶然私のパワポに接した方が、スライドの中に山室軍平の胸像を発見したら、それはこのときの後悔旅行で撮影したものだと思って下さい。

*

それはさておき、研修会が終わると、ほとんどの場合、主催者から「わかりやすかったですね」と声をかけられる。苦心惨憺のパワポに感心してもらおうと、密かにほくそ笑んでしまうのだが、そんなことが続く中で、はたと気づいたことがある。

これって、わかりやすさにこだわる強迫的準備のなせるわざなのであって、実は「わかりきったことを、目先を変えてわかりやすく」説明しているだけではないのか、と。何を隠そう、パワポに凝る人がかつて軽蔑していたのは、まさにこの点だったのだ。

しかも、さらに思いがけない問題が発生した。あるとき、「スライドなんて使わなくていいですよ」と言われて了解したことがあった。会場に到着して「なるほど」と思っ

たのは、ステージのバックがすばらしく、そこに立つと、いかにも映えるのである。

「これはよいな」

と感心しながら喋ってみて狼狽した。すごく拙い喋りしかできないのである。おそらくは、日頃パワポに頼って話すことに慣れてしまったせいだろう、その分、素で喋る力が衰えている。嗚呼……。

(2013/11/28 記)

荒木 晃子

全15編という、長い連載にひとくぎりをつけ、実際に刊行した著書にはこの後も章が続くが、対マガの連載は完結とした。これまでご愛読いただいたみなさまありがとうございました。

とはいえ、不妊をテーマに研鑽を積む筆者の活動に終わりはまだこない。生殖医療技術が日々進化を続け、不妊問題の社会解決にますます課題が増え続けているからである。卵子の凍結、出生前診断、精子提供、卵子提供、代理出産、生殖医療の国内法整備などなど。これまで、不妊に関心を寄せなかった人々にも、日常見聞きする新聞紙面やマスコミから、生殖医療に関するこのような専門用語? が飛び込んでくる時代がやってきた。さらに、iPS細胞からは、すでにマウスの精子が作成されたという報道もある。実現してはいない(と思う)が、人工的にヒトの精子や卵子をつくることができる時代がやってきたのだ。さあ、人類よ、君たちは何をどう選択するのだ!? と、何処かから誰かの声が聞こえてきそうである。以上の理由(= 苦しい言い訳)から、次回より、新たな連載をもくろむことにした。まるで追い立てられるような以下の心境も、その動機の一つにある。

現在私は、2013年1月設立したNPO法人OD-NET(特定非営利活動法人 卵子提供登録支援団体)の理事・マッチング委員長をつとめている。昨年依頼を受けた際には悩み、相当考え抜いた結果、大役を引き受ける覚悟をした。2013年現在、卵子提供に関する国内法は、どこを探しても「良い」とも「悪い」との記述はない。ま

だ国内制度として確立されていないのである。我ながら、大胆な挑戦だったと、いまだに思う。

まさかの事態に備え、(ご迷惑をかけぬよう)ある職場を辞職し、これまでお世話になった諸先生方へその決断を伝える折には、「これで見切りをつけられるかもしれない」と、まるで清水の舞台から飛び降りるような覚悟をした。その時は、片道燃料を積み飛び立つ神風特攻隊のつもりだったのかもしれない。とにかく、家族以外のすべてを失う覚悟だった。

あれから一年。世間の逆風にさらされつつ、いまも前進する自分がある。次の連載では、そんなこんなを綴ってみたい。

尾上 明代

これを書いている今日(11月24日)、日本心理劇学会の大会があり、シンポジストとしてお話をして来ました。この学会には、ドラマ表現や役を演じることを通してグループへの働きかけをする様々な手法を使う実践家や研究者たちが集まっています。シンポジウムのテーマは、「専門職養成と資格化をめぐる」でした。集団精神療法と芸術(演劇・ドラマ)が交叉する分野として、この19年間、「緩やかな連合体」を基礎にしてきた集団ですが、今回は専門性についての議論が行われました。

この分野での専門性は、個人とグループを同時に扱いながら、身体性のある(心身に直接働きかける)ドラマやロールプレイ等を使って課題に取り組み、変容・回復・解決などに向けて良い結果を生み出す難しい仕事だということにあります。その特質上、参加者への負の影響の回避、内面の開示についての扱い、参加者の心身の安全、確実な終結などが、実践家の基準要件のいくつかとして挙げられ、それらに対処する意識と技法を身につけることは、当然必須です。そのような研修と、個々のメソッドの技術を一定水準で習得した人に資格を付与することができれば、社会的にも有意義でしょう。社会では、今までの枠組と構造を超えた支援が必要な人たち・状況がさまざまに発生しており、それらの多くが、個人と集団の関係、また

集団の変化・変容を必要としています。その対処・援助に効果的なのはホリスティックなアプローチであり、このような今こそ、芸術療法と集団精神療法双方の特徴を合わせ持つメソッドの出番だと思っています。そのために実践の信頼性を自他ともに引き上げること、これが専門性のポイントです。

ただ、そもそも資格を設置することが必要なのか、何のため、誰のために作るのか、そして、学会員が実践しているいろいろな手法を一つにまとめた「資格」はできるのか、などなど議論することは沢山あります。今日はこの問題をテーブルに載せて、さまざまなディスカッションをスタートさせたこと自体に意義があったと思います。

専門性・資格と聞いて真っ先に思い浮かべる職業の一つが医者です。偽物の医者が村人たちを助ける「ディアドクター」という映画を思い出しました。専門性も資格も、提供する側と受容する側との相互関係であることは当然であり、その意義や問題点など、しっかり深く考え議論していくことが重要です！

木村 晃子

去る11月9日10日に立命館大学で行われた対人援助学会の年次大会に参加しました。

本マガジンを執筆している方、読者の方との出会いの場もなった、「対人援助学マガジンを考える」ワークショップを担当し、そのまとめ作業をようやく終えました。改めて編集作業の面白さを発見しました。

思い返すと、記者になりたい、先生になりたい、作家になりたい、役者になりたい、料理人になりたい…子どもの頃に描いていた夢はたくさんありました。今は、プロではないけれど、毎日の生活に、それぞれ夢みていたような仕事を与えられています。本編では、初めての大学での授業について書いています。こちらは「先生」業です。

毎日をおもしろおかしく感じられるようになってきました。

北海道 当別町 警段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

藤 信子

コミュニティを作る、変えるなど考えているうちに、ぜひ変えてみたいところを思いついた、国会である。現在「特定秘密保護法案」に対する反対、危惧が多くてもそれが反映されていない、という不安が強くなる。国会議員は国民の代表として選ばれているのだから、意にも介さないと感ずるのはちょっとおかしいような気がする。私はあの国会議事堂なる建物が問題ではないかと持っている。入ったことがないからよくわからないけれど、TV で見る限りとても重厚なインテリアと家具などに囲まれているみたい。そういいところで議論していると、困っている国民のことなど考えられなくなるのではないだろうか、と心配している。国会の建物、インテリアなどそろそろ変えてもいいんじゃないだろうか、とぼんやり考えるこの頃である。

水野 スウ

14号の短信中でちょっとだけ予告編をだしていた、憲法13条のすばらしさを簡潔にひとに伝えるための私なりの手だて。それが、小さな読みものつき歌のCD、というかたちになって、11月のはじめにできあがってきました。13条をもとにつくった歌「ほかの誰とも」に、歌をつくろうと思ったわけや、13条をはじめ、9条、96条、12条、97条についてもふれた文章を添えています。

淡いピンク色のCDジャケットの、右ポケットには歌が、左ポケットには14ページの読みものがはいっています。真っ先に手にした人が、「憲法がこんなに優しくパッケージされたのって、これまで無かった。このCDブックは、憲法に馴染みの無かったひとに、憲法を我が身に引き寄せて考えるきっかけになると思う」と。

こんな感想が、私には一番うれしいです。だけでも、ああ、これをつくろうと思っていた夏からたった3ヶ月の間に、ものすごいスピードをもって、憲法の本質が大きく変えられようとしている。今が今、国会で審議されている特定秘密保護法案。何が秘密か、それこそが秘密、というあやういこ

の法案が通れば、私たちが知るべき大事な情報は、権力につごうよく隠されてしまう。これって、憲法の主権在民を根っこからひっくり返すようなものではないかと怖れます。

ふりかえってみれば、私たちの多くにとって憲法がこれまで身近でなかったことが、今のこういう事態を招いているのかもしれない。私たちの一人一人が、憲法を語る自分の言葉を持っていたなら、少なくとも今みたいな、憲法と法律の下克上状態は起きてなかったのじゃないか、と思うのです。

私自身、やっと憲法を語る、私なりの言葉を見つけつつあって、その言葉の一つが、「ほかの誰とも」の歌でもあるのでしょうか。今回の短信をよんで、もしも興味を持たれたら、どうぞ、sue-miz@nifty.comの私までご連絡ください。読みものつき CD、一枚 300 円＋送料 80 円でお届けしています。

自著紹介

『紅茶なきもちへコミュニケーションを巡る物語』著:水野スウ 発行:mai works 四六版 200P ¥1,200(税込)

一般書店の取り扱いはありません。送料一冊160円。お問い合わせはこちらまで。
sue-miz@nifty.com

早樫 一男

前回(第14号)の短信では、「海外旅行に行く予定です」としていたところですが、9月下旬、無事、3週間余りの日程を終え帰国しました。

大きな体調の変化や崩れがなく過ごせたことは驚きであり、ありがたいことだと思っています。食べ物については、嫌いなものが結構ある(多くは食べず嫌いですが)ので、どうなるかと思っていましたが、幸いなことに、食べ物で困るということは殆どありませんでした。アルコールならなんでもOKというのが、良かったのかもしれない。

ロンドンで出会った人とは、会話の中で登場した家族を「ジェノグラム」に書くことで、ずいぶん話題が広がったという経験をしました。ジェノグラムはどこでも使えると

いうのが改めての実感です。「genealogy」(系譜学 or 系図学)という話題も広がりました。

ところで、パリには約2週間滞在しました。パリを始め、訪れた国が BS 放送などで放映されたら、まず録画。そして、時間があるときに、見直しながら海外旅行を思い出しているというのが密かなマイブームとなっています。

西川 友里

いくつかの学校で福祉系対人援助職養成をしています。

最近、金曜日の夜はテレビの前に張り付いています。

まずは 22 時 55 分からNHKでやっている『ドキュメント 72 時間』という番組。

毎週、カメラを1か所においてそこに来る人たちを 72 時間撮影しインタビューする、というだけの番組です。

カメラを設置する場所は様々です。24 時間ファミレス、健康ランド、西成の貸しロッカー屋、鳥取砂丘、普通のコインランドリー、新大久保の青果店、大きなゲームセンター…。

沢山の人の人生のはじっこがちらっと見えます。何気ない、普通に見える人たちが、それぞれオリジナルの人生を歩んでいる、ということを感じます。どれがよい生き方で悪い生き方で珍しい生き方でよくある生き方か、という意見・批判・批評なく、それを見てどう感じるかはこちらに委ねられているのが、この番組の心地よさだと思っています。

で、この番組が終わるのが 23 時 20 分。チャンネルをテレビ朝日に変えると、かの有名な「探偵！ナイトスクープ」のオープニングです。この番組は…まあ、皆さん大体ご存知ですよ。

うん、やっぱり、普通の人が一番面白いです。

中島 弘美

「理事に選出されましたことをご通知申し上げます」と、対人援助学会から手紙が届きました。「???」です。事情がのみこめないまま、理事会に出席しました。どん

な流れで物事が決まっていくのか、初心者マークをつけての見学?いや参加です。何をすべきかもタモタモしている、このマガジン編集委員の千葉さんが声をかけて下さり、研究会にかかわることになりました。

これまでの報告ブログに目を通して研究会の過去をざっくりと把握しました。特徴は、会場に行けば誰でも学ぶことができ、参加者同士の交流ができることだと受けとめました。発表者の話を聞くだけで終わらず、援助職のつながりをつくる場にもなっています。

さらに運営についての説明をうかがうと、さまざまな条件のもとで研究会が成り立ってことがわかりました。かなりの部分がボランティアで、皆さん自発的に活動されていることが伝わってきました。

浦田雅夫

障がいのある人たちの芸術活動を広げていこうという動きがあり、芸大にいて福祉にかかわる小職もそのような活動にかかわる機会があります。障がいがある人が描いたからすごいのではなく、障がいがあってもなかって表現力のある人はすごいのです訴える力が。つまり、障がいがある人がみな作家ではないのです。ただ、障がいがあることによって表現や参加する機会を奪われている人たちが大勢いることも事実で、その機会を保障しなければなりません。「エイブルアート近畿 2013 ひと・アートまち京都」を終えて。

坊 隆史

健康の話で盛り上げることができるようになる若者ではなくオジサンだという話を聞いた。思い返すと同年代との会話で「人間ドッグで～」、「コレステロールが～」といった健康会話で盛り上がるが増えている。ライフサイクルは次のステージに移行しつつあるとひしひしと感じた。嬉しくもあり寂しくもあり複雑な気持ちである。

松本 健輔

カウンセリングルーム HummingBird 主宰
<http://www.hummingbird-cr.com>

最近子どもの保育園の父親と初めてのパパ会に参加しました。夕方みんなで子どもを連れて少しお酒を飲んで親睦を深めようという趣旨の会です。初めてのことでどんな風になるか分からなかったが意外と面白い会でした。子どもと遊びながら、子どもの話をして、情報を交換し、そしてお酒を少し飲む。男性の育児参加がないと叫ばれて久しいが、なかなか進展していません。でも、こういう繋がりが育児をする父親に大切なのかもふと考えた会でした。

牛若 孝治

私はメンズファッションに拘っている。特にスーツとネクタイは大好きだ。「目の見えないあなたがどうやって服を選ぶのか?」。こういう質問はよく受ける。その度に私はこう答える。「そりゃあ、触った感覚で、これは俺に似合うかどうかを判断するのさ。もちろん、店員に色彩を見てもらいながら」。どうやら視覚に障碍のない人たちからすれば、私の衣服の選び方が気になるようだ。それも、コーディネート仕方が。10年前、仕事の休みごとに、紳士服売り場に駆け込むようにして、バーゲンセール服をあれこれ買っていたあのこと。「俺にも似合うメンズの服があるんだ」と分かったときのなんととも言えない興奮した気分。今や当たり前のようにメンズの服を買っているのだが、これは決して当たり前ではない。やはり、視覚に障碍のある私とて、自分にどんな服が似合うのかぐらいは分かっているんだぜ。

袴田 洋子

鎧が脱げた気がします。「クライアントに畏怖の念を持つ」も体感できているかもしれません。自分がどんなに出来ない実践者だったのかも、大学院に行って、しっかりわかりました。高い授業料払って行った甲斐がありました。「なんとかなるさ」という意識も持てるようになってきつつあります。私個人が抱える「課題」を「乗り越えたい?」とスーパーバイザーから問われて、「どうでもいい」と即答した時から、何

かが変わり始めました。システム論を体感中かもしれません。

団 遊

www.danasobu.com

僕が代表をつとめるアソブロックは、社員が全員自分で自分の年俸を決めるルールになっています。自分の仕事の値段を自分で決めるということです。会社のミッションは「事業を題材に人材を育成する」とことと定めているのですが、自分の給与を自分で決めることも、育成手段の一環です。その施策が面白いということで、先日取材を受けました。結構話題になっているらしく、よかったです。ご一読ください。

<http://w-kawara.jp/originality/how-much-your-work/>

乾 明紀

今回は、対人援助学会第5回年次大会の企画ワークショップの内容を報告することにしました。経緯は、ワークショップの参加者から「大変面白い内容だった。でも、参加者が少ないのが残念。対人援助にも重要な情報があったので、マガジンで公開したらどうか?」という声があったからです。この声に後押しされ、ワークショップの前半部分(話題提供者2名分の報告)をまとめました。次号では、後半部分(話題提供者1名分の報告とディスカッション)を報告する予定です。

サトウタツヤ

★立命館大学と福島県が協定を結ぶことになりました。大学と県の協定というのは「カテゴリーミスイク」なのではないか? という気もしますが、福島県の情報に関西で発信するために頑張っていきます。

『福島民報』のサイトをご覧ください。

(福島)県と立命館大復興へ連携 年内にも協定を締結

<https://www.minpo.jp/news/detail/2013111412121>

『産経新聞』

<http://photo.sankei.jp.msn.com/highlight/data/2013/11/13/31fukushima/>

12月20日、協定締結の予定です。

★本学会会員の安田裕子さん(衣笠総合研究機構専門研究員)が、日本学術振興会の審査員表彰<特別研究員等審査会専門委員(書面担当)>を受賞しました。

http://www.ritsumei.jp/news/detail_j/topics/12214/year/2013/publish/1

すごいです!!

★時々、趣味は何ですか?と聞かれることがあります。実際、あまりないなあと思うのですが、一つ、替え歌作りは趣味になるかもしれません。

以下は、とある楽曲にあわせると面白いかも、というものです。ただし以下の歌詞(のようなもの自体)は、現在存在する歌とは全く無関係です。

論文投稿したいのに

統計まるで分かってない

何度目かのリジェクトの準備

周りをみれば大勢の学術雑誌あるけれど
質的データ 載せてはくれない

エクセルに打ち込むデータ ぼんやり眺めてたら

知らぬ間に仮説にあわせ 統計ソフト動き出す

止められない 統計検定 カモン波紋鬼門苦悶 検定

有意差無い!

どうする統計検定

仮説はそんな悪くないよ

P P P 有意差よぶには人数増やすこと
どうする統計検定 水準今日より低くしよう。

P P P P P P

データは捨てたもんじゃないよね

あっと驚く有意差がでる

論文どこかで採択出る 予感。

★誠信書房から出ている『TEMで始める質的研究(2009)』『TEMでわかる人生の径路(2012)』、2冊とも増刷となりました。TEMのアイデアを得て、論文などを書き始めたのが、2004年ですから、今年(2013)はちょうど10年目の節目でした。2014年もますます頑張っていきたいと思

います。『ワードマップ TEM』など何冊か出していきたいと思います。

参考:TEMのサイト

<http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/TEM/watistem.html>

大野 睦

大きな節目を迎えた今年。香港での発表の機会などもあり、様々な視点からその転機を見つめるときとなりました。屋久島では今年、例年より早く初雪が降りました。

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

中村 周平

私事で大変恐縮ですが、今年8月に祖父と犬が亡くなりました。自身の事故後、介護が中心となってしまった家族の負担を少しでも減らせるよう、大阪の自宅を出てずっと支えてくれていた祖父。小学6年の時に我が家に来て以来、自由奔放な行動で家族に癒やしをくれていた犬。この数年は、祖父と犬と自身、「二人と一匹」という生活を送っていました。不思議な構成でしたが、紛れもなく大切な私の家族でした。

そんな大切な家族が突然いなくなってしまったことに、アタマではわかっていても、気持ちがなかなかついていけないのが正直なところ。祖父と犬が支えてくれた想いと時間を大切に前に進むことが一番の弔いになる…そのような形で今を受け入れていく自分がいます。

浅田 英輔

ただいま11月ですが、青森では初雪がありました。これから雪の季節です。我が家は、都会ではありませんが住宅街の中にあります。隣まで5キロとか、買い物するのに車で30分とかいう意味の田舎に住んでいる人のことを聞くと「引越せばいいのに」などと勝手に思いますが、南国の

人からすると、「そんなに大雪なところに住み続けるのが理解できない」となるでしょう。都会の人達が、2,3センチの降雪で交通マヒなどと聞くと「危機管理が足りん！」などと思いますが、1メートルの積雪がある地に住み続けるほうが危機管理が足りないのかもしれませんが、相談に来る問題行動のある子たちのほめるポイントには「雪かきだけはきっちりやるんですよ」といったものがあつたりもするので侮れない、雪。

脇野千恵

◆色々考えるところがあり、今回の号の原稿が間に合いませんでした。残念…。

私事ですが、ついこの間還暦を迎えました。学校現場では一番年上となり、さて来年4月からどんな働き方をしようか悩む毎日です。

結婚を機に退職し、子育ても楽になったところ臨時講師として復帰しましたが、とうとう再任用の道は開かれず、退職金もなく引退することとなります。たくさん子どもたちと過ごした思い出は、私の唯一の宝物です。

最近では、大人になり、家族をつくり、親になっていく教え子と出会う機会が増えました。ちょっと話をすると、昔のなつかしい出来事に花が咲きます。思春期でぐちゃぐちゃだった子ども達は、皆ちゃんとした大人になっていく。そのことが嬉しく、これからは、うまくやっていってほしいなと願うばかりです。

中村 正

離婚・再婚が多い社会では子どもの成長に誰がどんな責任をもつべきなのか、社会はどんな用意をすべきなのかなど悩みは大きい。離婚・再婚の増加は個人主義の拡大というよりは男女というか性というか、対関係をもとめる自由と欲望そのものの結果であるのだろう。高尚な社会制度の話ではない。もっと下世話な欲望の話である。翻弄されるのは子どもである。子どもが欲しいという欲望(不妊治療ニーズ、医療技術開発の欲望、医療市場の原理、養子縁組制度、財産相続や家系継承

などが錯綜する)も含めて、全体として俯瞰してみればアノミー(無規範状態)がすすみ、その後、何らかの整序過程がはじまり、生きにくいルールができあがる。それでもきちんと整理されるべき課題は子どもの権利だという点は無視できないので大学の仕事の合間をぬって11月の半ば、カナダのトロントに調査にでかけた。離婚後の子どもの親との面会や交流の制度が精緻にできているからである。日本でもそろそろ大きな問題となるのだろうし、参考になることは多々あったので、いずれ本マガジンで紹介していきたいと思うが、少しばかりやるせない気持ちにもなった。それらを新しい家族法、ジェンダーの平等、家族支援、心理臨床の話として語り出したとたんに、面会交渉権、共同親権、片親引き離し症候群、愛着障害などとやたら理論的な事項になっていく。しかし実際は、欲望そのものに忠実な性のリアルがあるだけだ。生と性の現実と、社会と人間を語る知識のあいだの「落差」を感じつつ、いったい私は何をしているのだろうかと思いつつ、しかしそれでもよりましな生のゆくえを言葉にすることしかできないのかと思いつつの調査だった。そうはいっても雪が舞い、寒風吹くトロントは美しい街だった。時間をみつけて Art Gallery of ONTARIO (オンタリオ州立現代アート美術館)に出かけた。妖艶な「デビット・ボウイ展」を開催していた。日本の方ですかと声をかけられた。トランスジェンダーあるいはトランスベスタイト(異性装者)あるいはトランスセクシャルとおぼしきこれまた妖艶な日本人だった。この特別展のためにトロントまで来た楽しそうに語ってくれた。大きなポスターの前で一緒に写真をとって欲しいという。彼/彼女もまた欲望に忠実に生きている。人々の欲望にあわせて社会と文化が歩むことの光と影の双方をみながら何かを表現できていけばいいのかと思いつながらのトロントの街は印象深く残る街のひとつになるのだろう。